

# ひとりで悩まないで！ ～ 女性のための相談 ～

夫や恋人(パートナー)からの暴力(身体的・精神的・経済的)に悩んだり、苦しんだりしている女性のための相談です。

## 誰にも言えずにいた事 話してみませんか

秘密は固く守られます。お気軽に、どうぞ。

◆日 時 毎月第4金曜日 午後12時30分～5時30分

◆15年度の予定日

4月25日	5月23日	6月27日	7月23日(水)又は30日(水)
8月22日	9月26日	10月24日	11月28日 12月26日
1月23日	2月27日	3月26日	

◆相談員 専門の女性カウンセラーがお話を伺います。  
(フェミニストカウンセリング研究会所属)

◆相談は無料です。

◆相談の結果、必要な場合は弁護士相談や、関係相談機関との連携をはかります。

◆申し込み 諏訪市役所 男女共同参画推進室へ、電話でお申し込みください。  
TEL 0266-52-4141 内線452



## ～ご協力ありがとうございました～

3月1日(土)、2日(日)に岡谷市民総合体育館で開催された「諏訪ルネッサンス みんな集まれ! すわ未来21」に男女共同参画市民協議会のブースを出展しました。活動紹介のほか、来場者300人に男女共同参画についてのアンケートを行いました。多くのみなさんにご協力をいただきありがとうございました。(結果は次号でお知らせします。)



『配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律』(DV防止法)が平成13年10月に制定され、これまで「家庭内の問題」とされてきた「ドメスティック・バイオレンス(配偶者などからの暴力)」が、社会的に犯罪であると認められました。

## 編集後記

雪と氷と寒さから解き放たれて明るい陽ざしに心とほぐれます。全ての市民が性別で制約されることなく、いきいきと暮らせる諏訪市を目指して「市男女共同参画推進条例」が現在市議会に提案されています。また4月より、諏訪市男女共同参画計画「男女いきいき諏訪プランⅢ」も施行されます。

市民一人ひとりが主役になって男女共同参画社会を実現しましょう。



## 主な内容

- 2面 ともに生きる諏訪市民大会
- 3面 各団体からの意見発表
- 4～6面 ジェンダーにとらわれない 男たちの本音トーク
- 7面 アンケート結果報告
- 8面 女性のための相談

昨年10月25日に、千葉県松戸市の梨香台保育園と女性センター「ゆうまつど」へ視察研修に行ってきました。

梨香台保育園は、「食」を通じての「ふりーせる保育」を実践しています。制服は自由、きちんとしたクラス編成はなく、登園後「どこで、何をしておぼろかな」と個人の意思を尊重し、自分で決めています。「みつけよう! がんばってみよう! やってみよう!」色鮮やかに描かれた美しいスローガンが目につきます。

市街地から少し外れた、広々とした梨畑に隣接する園は、築30年近い古い建物ですが、美しく、心細やかに修復されて、本当に温かさ、安らぎを感じました。

また、市の中心地にある女性センター「ゆうまつど」は、男女共同参画の先進地らしく、市民グループによる多彩な事業や、相談、研修、情報提供など、市民へのきめ細かな支援を行っています。

# “らしさ”のこだわりから今、

## 第3回ともに生きる諏訪市民大会

平成14年11月30日(土) 諏訪市働く婦人の家

大阪大学大学院教授の伊藤公雄先生に、男女共同参画の問題を男性学という視点からご講演いただきました。

### 女性と男性のための 男性学入門

専業主婦とは逆に、妻が外で働いて、夫が家事や育児を専業にしている、いわゆる“専業主夫”の人たちの手記をみると、やがては再び社会復帰して、元の“外で働く夫”に戻るケースが多いです。つまりは、男女の役割を逆転したところで、問題の解決にはならないのです。男女とも労働参加、地域参加、家庭内参加がバランスよくできる社会の形成が、男女共同参画社会実現の1つの方向性です。私自身は、15年前から“働く主夫”を自称して、大学の仕事をしながら家事を行っています。

明治になって男尊女卑が強化され、戦後工業化の進展で男女の役割分担がはっきりしてきました。世界の流れは、1970年頃から女性の社会参加が急速に進展してきましたが、出遅れた日本は、世界中から「女性差別大国」と見られるようになりました。それは、女性の社会参加の比率が、その国の成熟度の物差しになっているからです。

女性の社会参加の一方で、今、男性の生き方が問われています。

男性主導でつくられた社会で、男性自身が生き生きと満喫した生活を送っているのでしょうか。むしろ男性の方に自殺の急増や、過労死など様々な問題が沢山起きています。



女性学に対し、男性もまたジェンダーによる「らしさ」という殻から解放されて、より人間らしい生き方探しの“男性学”が必要になってきました。女性のサポートを前提とした生き方から、精神的にも生活的にも自立する方向に変わらなければなりません。

これからの少子高齢化に備えるためにも男女共同参画は必要です。男女が共に育児を担い、女性が働きながら出産・育児するのが当たり前ができる社会になれば、少子化にも歯止めがかけられます。

ここにきて、男女共同参画についてかなり誤解を含んだ反対意見が広がっています。男女共同参画は男女を“同じ”にしてしまうものではありません。もともとの違いである女性の妊娠・出産という生理的機能をきちんと保護するとともに、それを理由とした差別や排除をしてはならないことが出発点です。また同時に、社会的差別につながるような“らしさ”の押し付けを否定するのは当然ですが、個人の内面にかかわる“らしさ”まで否定することは誰にもできないはずだし、権限もありません。

みんなが同じになるのではなく、一人ひとりの違いを認め合いながら各々が自分の能力を発揮していけることが男女共同参画の流れであると思います。

# アンケートを実施しました (結果報告)

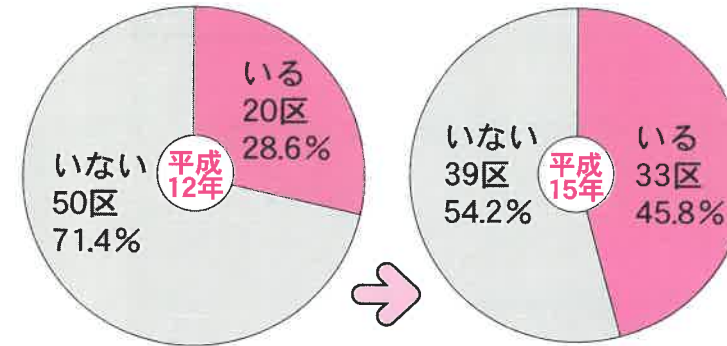
男女共同参画市民協議会では、区役員、および保育園保護者会役員の女性、男性の参画状況を把握するため、アンケートを行いました。

## 「ともに考える地域」

区の役員 女性の参画は？

- ◆実施期間 平成15年1月30日～2月13日
- ◆対象 市内94区長 ◆回答72区 (回答率76.6%)

区の議決機関役員(区長・副区長・会計・協議員等)に女性がいる区の割合



女性の議決機関役員内訳(全区の合計:人)

役職	年	平成12年	平成15年
区長		0	0
副区長(区長代理)		1	2
会計		1	5
協議員など		58	135

役員選出にあたっての取組について  
(複数回答可)

今まで慣例で決めていたが規約をつくり選出基準を明確にした	5区
役員の定員数の中に「女性何人」と明記した	2区
「役員選考委員会」等を設置した	2区
女性も候補にあがるようにした	15区
女性が議決機関へ就任するにあたって家族の応援が得られた	9区
次年度への継続審議となった	7区

また、上記の取組に至る過程においても、様々な形で女性の区政参画を推進する区が増えてきています。

## 「ともにする子育て」

保育園の保護者会役員お父さんの参加は？

保育園の保護者会役員は、会長をはじめ、ほとんどが女性という状況ですが、保護者会連合会の働きかけや、昨年11月に、男女共同参画市民協議会から保育園及び保護者会宛に送付した「男性の役員への参画推進について」の提案書などにより、徐々に男性役員も増えてきているようです。

1園2名だった男性役員が、15年度は4園8名に増えました

- きみいち保育園……2名→2名(会計監査)
- 前年度より保護者会の規定に「男性2名以上」と記載
- 片羽保育園……0名→1名(物資幹旋係)
- 四賀保育園……0名→2名(畑、観劇、芸術鑑賞等の係を検討中)
- 豊田保育園……0名→3名(会計・運動会係)

そのほか、「次期役員対象の全家庭に口頭にて男性役員を募ってみた」など、役員誕生には至らなかったものの、男性の役員参画に向けての動きがいくつかみられました。



## — ジェンダーにとらわれない — 男たちの本音トーク

私自身、男らしさというのが何かは良くわかりません。というのは、男らしさ女らしさということに関係なく生きて来たからだと思います。「自分らしさ」或は「人間らしさ」という言い方がいいかもしれませんが、男も女もやっぱり身体の成り立ちは違うし、考え方も感性も違う。そういうことを考えると同じ人間らしさでも、「男の人間らしさ(自分らしさ)」「女の自分らしさ(人間らしさ)」「らしさ」にも男、女があるんじゃないでしょうか。ところが、ただ、「人間らしさでいこうよ」というと、男の良さとか、女の良さとかが多少消えてしまうのでは。そういうことに対するアレルギーが一般の社会の中にはまだまだあるのかなと思います。だから意識改革は一緒にできないかなという気がちょっとしています。また、制度などは整ってきていると思いますが、その制度がちゃんと生かされないのは、意識が育っていないからではないでしょうか。意識と制度は両輪だと思います。

### ◆河 西

講演などをやると必ず「奥さんは介護はやらないの?」とか、「なぜ男がやっているのか」という趣旨の質問が出るのです。特にそういうことを言うのは年代層が上の人に多いです。

それから、農村の方に行くと「もっと早く男性たちに話を聞かせていれば、女性たちが介護疲れで死なずに済んだのに」ということをいまだに言われます。だからこそ声を大にして意識改革をしなくちゃいけないと思います。そして、諏訪の人たちの意識が少しでも変わっていけば、諏訪市の男女共同参画ももっと進むはずだと思います。

### ☆男女共同参画の今後についてご意見、お考えをお聞かせください。

### ◆木 川

日本ではベビーシッターの制度が無いから、音楽会や、どこかに出かける時に子どもを預けて遊びに行くというと、多少の罪悪感を感じることもあるんじゃないかなあ。しかし、そうではなくて子どもや介護老人を預け、堂々と出掛けられる社会になればいいと思います。アメリカでは、12歳以下の子どもだけを家に残して留守にしているいけない規則があり、預かってくれる人を雇うんですが、安心して預けられるような環境を整えていかないと、子育てや介護をしている人は夫婦で共に掛けられることがなかなかできない。気分転換や生活パターンを変えることも大切ではないでしょうか。

それに最近、東京近辺では、女性たちが駅の近くに保育園をつくらしたり、夕方遅くまで預かってくれる保育園が出来たりしていますが、このように子育てをしながらでも働きやすい環境をつくる必要がありますね。それからもっと男女共同参画について宣伝をしていくべきで、それも繰り返し宣伝しないとダメだと思う。広告でも必要の無い広告は見ないが、何か買う目的がある時には逆に広告を探すでしょ。

### ◆宮 野

性によることのジェンダーバイアスがあってはならないと思いますが、本来的には、男性と女性は生物学的に違うものと言う原点に立って、運動(改革)に取り組んで

いった方がいいと思います。それから男性も生活の中で、食事、洗濯など女性に頼らずに自立していくということと、また女性も男性に頼らず、地区の役員など引き受けていただくことが良いことだと思います。しかし、女性の中にはまだ、「私には出来ない」と、自分で自分の能力を決めてしまっている人が多いのではないのでしょうか。そうした呪縛から自らを解いて、チャレンジするようにしていかなければいけないと思います。結局、人間は一歩出れば次の一歩が見えてくる。ひとつハードルを超えると、次のハードルは結構簡単に超えられるので、女性にはその最初の一歩を出してほしいと思います。

それともう一つは、男女共同参画の取組をしている人達、特に我々の年代は古いものも引きずりながら新しいことに挑戦している。そうすると当然試行錯誤もあるし、失敗もある。その失敗をきちんと捉えて、思考の柔軟性をもって出直すとかが、失敗をどういうふうにかかすかが大事だと思います。意識の改革ということはそういうことだと思います。

### ◆河 西

以前、富士見町での集まりで、参加者が各家庭の漬物を持って来てくれまして、家々によってみんな味が違うんです。どういう漬け方をしたのかということで、話題が盛り上がりました。

今、スローライフ、スローフードというのが時代の一つのキーワードになっていますが、信州には野沢菜漬けをはじめ、漬物がいっぱいある。男性の集まりの時には各家庭の漬物を持って行って、漬け方などを話題にしてみる。わからないことは、母や妻に聞いてみるというようにすれば、家庭でも共通の話題ができるかもしれない。だから、まずは漬物一つとっても女性ばかりでなく、男性も我が家で漬けてみるというふうになればいいかもしれないですね。

(まずは男女共同参画も食文化からというのでもいいかもしれませんがね。)

### ◆宮 野

スローフードの取材をしているノンフィクション作家の女性が書いたものの中に、『米大陸を徒歩で進行していたアメリカ先住民たちが歩くのをやめ、輪になって座りこんだことがあった。同行者が尋ねると、「私たちは急ぎ過ぎたので魂を置き去りにしてしまった。だから、こうして魂が追いつくのを待っているんだ」と答えた。』という話があるんですが、今、私たちの生活はとても忙しい、どうしてこんなに忙しいのかと思うくらい。だから、男女共同参画の会にも、ゆとりがなかったり、緊張しながら出て来るんじゃないかと、楽しいことを取り入れたり、ホッとできて、魂が戻ってくるような会になれば、もっと自然にみんなが集まってくるのではないかと思います。

(いろいろと本音の部分もお聞きでき参考になりました。貴重なご意見はこれからの活動にぜひ取り入れ生かして行きたいです。みなさんどうもありがとうございました。)

# 踏み出すあなたの第1歩!

講演に先立ち、市内の3団体から男女共同参画についての意見発表をしていただきました。

## 役員にお父さんも入って!

保育園保護者会連合会 小池野理子さん・高野加奈枝さん  
関谷久美子さん・茅野祐治さん

市内に保育園は17園あります。役員構成は園によって違いますが、14年度は総勢204人。その内、男性役員がいる園は1園で2名のみです。母親だけの考え方では、運営に片寄りがあるのではないのでしょうか?やはり、子どものことですから父親も役員に参加してみんなで考えていきたいものです。役員をやってみると色々な人と友達になれたり、園での我が子の様子を近くでみる事ができたりと楽しいこともたくさんあります。これからの課題としては、男性の参加しやすい体制づくりと、子育てに対する男女の考え方の見直しが必要です。



※当日は、楽しい寸劇で発表していただきました。

PTA連合会会長 矢花俊彦さん



現在、小・中学校のPTA会長は全員男性です。「男性でなくてはならない」という決まりはありません。選出は、①地区の持ち回りで行っている、②会長・副会長が会員の中から候補者を選び選考会によって決めている、③知り合い関係で選出しているなど学校により様々です。

私が入っている太鼓のグループには、誰が偉いとか、常に決まったリーダーがいるということではなく、イベントのつどリーダーが決まってくという状況ですが、そこで重要と感じていることは、会長を支えてくれる器や、仲間が周りにどれだけいてくれるかということです。PTAなど、どんな団体においても、失敗しても受け入れてくれる、1年で変わっていく役員を、いつでも暖かく協力的に見守ってくれる雰囲気が一番大切だと思います。そのような雰囲気があれば気楽に役員を受けることも、また、一緒に頑張っていけるという気持ちにもなれると思いますし、さらには、女性だとか男性だとかということも関係なくなるのではないのでしょうか。

## 会長は男性と決まっているの?

## 地域のことも男女でいっしょに考えよう

男女共同参画市民協議会副会長 牛山計子さん

「男女共同参画」は、女性が男性と同じように社会に出て行くことだけではありません。「私が私らしく生きること」が大切なことです。「結婚しても、子どもができて仕事も続けたい女性は続けることができる」「仕事を続ける妻と家事に専念する夫がいる」そんなことをみんなが認め合い、女性も男性も自分の意思と責任において自ら選択していくことが大切です。社会の最小単位である家庭において無意識に分担している男女の固定的役割を見直し、男女がお互いに協力し合って子育てや介護に携わることが出発点だと思います。

男女共同参画市民協議会の活動として、市内8つの区と交流会を行ってききましたが、その中には女性の区長誕生や、区役員への女性登用について検討する区も増えています。長年続いた男性優位の社会を変えることは簡単なことではありませんが、男性ばかりでなく女性を含めての意識改革と環境づくりが必要です。一人ひとりの努力の積み重ねを、小さなコミュニティから大きな組織へと広がっていくことが大切だと思います。





# — ジェンダーにとらわれない — <sup>ひと</sup> 男たちの本音トーク

☆ご自身と男女共同参画との関わりについてお聞かせください。

◆河 西  
現在は隔週に諏訪に来て、かりんの里に預けている母の介護をしています。火曜の朝自宅をたち、金曜の最終便の高速バスで帰るというような生活です。

40年程前にニューヨークの会社に1年半ほどいた時、人間として家事や介護をするのは当たり前だということを肌で感じてきました。ですから私は家事も介護も自然体でやっているつもりですが、日本ではゴミの袋を集積所に捨てに行くこと「妻の尻に引かれている」とか、介護をすれば「なぜ奥さんがやらないのか」などと言われてしまいます。なので今私が困っている問題はジェンダーの問題です。

◆木 川  
卒業後、10年ほど諏訪で勤め、その後転勤を希望し東京で働いていました。その間5年半ほど転勤でロサンゼルスに家族と住んでいたこともありましたが、一昨年の6月に諏訪に戻り、昨年末に退職しました。82歳の母の介護もいよいよ必要になり、今までは妻に任せきりでしたが、段々と他人事ではないと感じているところです。

男女共同参画市民協議会に入ったのは、たまたまこの会に誘ってくれた人もあり、新しいことにすぐ興味を持つ方なので、つい・・・(笑い) それに、二人の娘の子育てでは、男女の区別をせず育て、気持ちでは性別で差別しないといった意識は持っていましたが、仕事の面では多少反省しなくてはなかったこともありましたので。

◆宮 野  
現在は福祉の仕事をしていただいておりますが、以前教育委員会にいた時に女性行動計画の第一次と第二次の策定に関わりました。また、若い時から「働いている女性は素敵だな」と思っていました。目的意識を持って自己実現のために働いている女性は輝いていましたので、そういう生き方はいいなと思っていました。それなので男女共同参画については自然に関心が持てました。

男女共同参画も始めの頃は「女性問題」という言い方をしましたが、女性問題ではなく「男性問題」という視点が大事ではないかと思えます。男女共同参画を進めていく上では、男女共に自立性ということが大切ですが、特に男性の生活面での自立というのが大切ではないかと考えています。

☆今、男性も「男らしさ」という鎧を脱ぎ捨て、自分らしく生きられる社会が望まれていると思えますが・・・

◆河 西  
私には“男らしさの鎧”と言うものは何もないと思えます。

社会的・文化的につくられた性差(ジェンダー)にとらわれず、より人間らしく

男性は会社を辞めてもなお、かつての肩書きに抵抗があるが、女性にはそういうものがないから非常に付き合いやすく、対等でお付き合いができる。

私は在職25年目を期に会社人間から社会人間に方向転換し、いろいろな会に出掛けて行ったり、人と交流していたので、退職してからもあまりショックも無く、フラットに人と付き合っているんだと思います。男性も意識を直して、フラットにしなければ介護や家事などではできないのではないかと思います。

◆木 川  
それは確かに男性にはありますね。時々、妻が自分の参加しているグループ活動の話を家ですると、私はすぐに「ご主人は何処に勤めているの?」と聞いてしまうんです。そうすると妻から「私の友達とのお付き合いに、そういうことは関係ありません」って言われるんです。そう言われてみればその通りかなと思った。会社という肩書社会から、退職後は、例えば「木川さん」の付き合いになる訳ですが、いまだ私の意識が変わってないところもありますね。

東京あたりでは、都心に勤めていても自宅が遠いので、いったん会社を離れると、元同僚とはなかなか会うことが出来ない。人とのお付き合いは、辞めて1年くらい経つと終わりになってしまつとよく言うんです。柏市に住んでいる時は2、3ヶ月に1回ほど諏訪市に帰り、茅野の畑に通ってました。こちらに帰って来ると色々やる必要がありますが、柏での休日は妻とスーパーに行くくらい。長野県の方は畑があつたりして、休みの日にも働けるし、年をとっても力量に応じて畑仕事等が出来る。これが長寿県と言われる由縁ですよ。

(最近、東京周辺では、退職して地域活動に目覚めているという男性が、増えているそうですが・・・)

◆宮 野  
東京の近郊だけでなく、諏訪でもだいぶ増えてきていますね。市のボランティア連絡協議会など見ていると、退職した方で地域活動に参加している人がとても多くなっています。地区の社会福祉協議会でもそうですね。

◆河 西  
私も諏訪に帰ってくると、“聴くだけボランティア”というのをやっていますが、お年寄りには人に話したいことがいっぱいある。だけど家族はなかなか聞いてくれない。他人が話を聞いてあげると、もっと元気になる。男性も時間があつたら、親戚でもお友達でも良いから、お年寄りの話を聞くということをすればいいと思います。

(地域のボランティアグループに男性が大勢入れば、雰囲気もきっと変わりますね。)

い生き方を目指している3人の方にお集まりいただき、お話を伺いました。

☆これからは、男性も女性も共に介護を担っていくことが必要だと思いますが・・・

◆河 西  
母は明治39年生まれで、とても気が強い人です。妻や、弟の妻に介護してもらうよりも、私と弟が、母の世話をした方が一番自然で、摩擦が少ないかなということになりました。実家では炊事から洗濯・掃除すべてやっていますが、大学生時代の部活の合宿での経験があるのでそれほど苦には感じていません。

男性が会社で経験して来たことは、介護の現場に十分に生かすことができます。「創造的介護」と私は言っていますが、できるだけ遊び心を入れ、どんどん新しいものにチャレンジし、楽しみながらやるようにしています。深刻に考えないで、マイナスのことをプラスに変えていくことが何事にも必要だと思います。それに、もし四六時中介護をしていたら、私はとっくにまいっていたと思いますが、諏訪に戻ってくれば温泉がありますし、往復の高速バスの中を書斎代わりにしたり、音楽会の公開録音や、大学の公開講座に出掛けたりして気分転換をしています。こういう気分転換をしていれば長続きもするし、顔をしかめながら介護をするということもなくなると思います。

◆木 川  
父の介護をしていた時、娘たちにも下の世話などを積極的に手伝わせました。今では私に対して気に入らないことがあると「お父さんの下の世話はしてあげないから」と言われます。(笑い) 今の子どもは核家族化で身近にお年寄りがいなかったり、親が子どもに介護の手伝いをさせたりしないが、自分自身はもちろん、積極的に家族全員を介護に引っ張り込まないと、次の世代は大変だと思います。

それから、介護者への慰労のことについてですが、妻などから話を聞くと、とにかく介護は精神的に疲れる。一番有難いのは、デイサービスとショートステイ、これが最大の慰労だと言うんです。旅行などに行く時も、安心して預かってくれるところがあればいいと思いますね。

◆宮 野  
子ども二人は、今は家を離れていますが、小さい頃から私の母と一緒に生活したということがとっても大事で、母がちょっと身体が悪くなった時、遠くにいても、とて

も心配してくれ、母も自分の気持ちをわかってくれることがとても嬉しいようです。それは、世代を越えて母の時代のごとが伝えられていたり、おばあちゃんから沢山の愛をもらったということによると思います。

介護の問題では、「我々の世代が親を見る最後の世代で、子どもから見てももらえない最初の世代」と言われてますが、私たちの世代は良い介護つき住宅や、施設があれば利用するようになると思っています。特別養護老人ホームもこれまでは4人、6人部屋が中心でしたが、これからは厚生労働省の基準が変わり、1人1部屋という時代になりつつあります。

☆今の男女共同参画についてどう思いますか?

◆木 川  
皆さんは、男女共同参画についてだいぶ理解をお持ちのようですが、私は市民協議会に入るまでは男女共同参画という言葉も理解していませんでした。世間の9割くらいの人はまだその程度じゃないかなあと思います。正直言って自分たちの生活の中ではあまり話題にはならない。これをどうするか一つの課題だと思います。

男女共同参画という言葉自体も、なんだか角張ってガチガチしている感じがする。言葉が理解されもっと広がっていかないと、ベテランや経験者だけの集まりで、そういう人たちだけの自己満足になりかねないように思うんですが。

本当の意味の男女共同参画の社会になっていくには、やはり女性が社会にもっと出て行かなければダメだと思います。「女性が、子どもが生まれても働ける」、「介護の必要な高齢者がいても社会に出られる」そうした環境や制度を整えることも大切だと思います。

◆宮 野  
これは、多分生き方の問題じゃないでしょうか。私は若い頃、働く女性と結婚したいと思っていて、実際働いている人と結婚しましたが、その当時、妻と「男も女も職場では100%の力をお互いに出さなければならぬ。だから家庭では家事や育児は50%にしようね」という話をしました。ただ、「料理は出来ないけど、後のことは一緒にやるからね」ということも言いました。その50%ずつというのは決して一つのことを50%ということではなく、それぞれ役割分担で得意なことをやり、お互いのことを助け合っていこうということで、今考えてみると、それで良かったと思っています。

男女共同参画の中で、例えば「男も料理をして台所に入ろう」と言うけれど、理念として男女共同参画はいいと思いますが、具現化する時はそれぞれの家庭、その人の置かれている状況によって具現化の仕方は当然違って来ると思うし、木川さんがおっしゃったように、それが定着しないというのは、「一般論としてこうあるべきだ」ということが先行しているからではないでしょうか。だから「何で?」という疑問がつかうと思んです。



河西和彦さん  
千葉県船橋市在住。定年退職と同時に、遠隔在宅介護を続けて今年12年目を迎えています。また熟年モチベーターとしても活躍中です。



木川俊文さん  
昨年千葉県から諏訪市にUターン。現在は諏訪市男女共同参画市民協議会会員として活動しています。



宮野孝樹さん  
市福祉部長。若い頃から女性の社会進出に関心をもち、共働きを続けています。